

1 事業名 小学生チャレンジキャンプ（モデル事業）

2 必要性

平成 25 年 1 月に公示された中央教育審議会答申「今後の青少年の体験活動の推進について」では、教員養成系の学部 に在学中の大学生の体験活動のあり方について「子どもたちが体験活動を行う際に、学生が自ら企画を行ったり、引率したりボランティア等として参加できる機会を取り入れることで、子どもの成長を実感したり、予期せぬ子どもの行動も予見し対応したりするといった教員に必要な能力を身につけることができる。」と述べている。また、平成 22 年 7 月に示された「子ども・若者ビジョン」（子ども・若者育成支援推進本部）では、若者の社会形成・社会参画支援のためにボランティア等の社会参画活動の推進を図ることを基本的な考え方として示すなど青少年期におけるボランティア活動等の体験が重視されている。現在、国立青少年教育振興機構でも、教育事業や研修支援等の運営協力・指導補助などを担うボランティアの人材の育成を行っている。

これらを踏まえ、当施設でも次代のリーダーとなる青年ボランティアの育成を目指し、そのきっかけづくりとなるような参画事業の機会を提供することが今後より一層求められる。

3 趣 旨

本事業は地域や社会に貢献し、次代のリーダーとして活躍できる人材を育成するため、これから社会に出ていく大学生ボランティアが、小学生への体験活動の提供をコンセプトとしたキャンプの企画を、立案から運営までの一連の流れを体験するプログラムとして開発することを目的に実施した。

4 後 援

出雲市教育委員会、大田市教育委員会、雲南市教育委員会

5 連 携 ・ 協 力

大田警察署、大田消防署、出雲警察署、出雲消防署、漁業協同組合 J F しまね、出雲飯の原農村公園吉栗の郷、三瓶公民館

6 事業の内容

(1) 事業の特色

当施設では日頃から次代のリーダーとなる青年ボランティアを養成・育成しており、これまで教育事業「さんべ祭」を中心に活躍している。彼らから「子どもたちを対象にしたキャンプを実施してみたい」という意見が多く挙がり、平成 24 年度に子どもゆめ基金体験の風リレーションシップ事業として夏（夏を満喫☆ギョギョっとサマー in さんべ）および冬（冬を満喫☆ギョギョっとウィンター in さんべ）に各 1 泊 2 日の日程で事業を実施したことが本事業設立の発端となり、平成 25 年度は教育事業として実施し、さらに平成 26 年度は当施設のモデル事業として位置付けて実施した。

本事業はこれから社会に出ていく大学生ボランティアを対象として、前述の趣旨の下、プログラム



デザインからチラシの作成、広報活動、事前準備および本番当日の運営までの一連の流れを大学生ボランティアが担う、参画型の事業である。当施設職員はキャンプのプログラムデザインの際のアドバイスや安全管理などのサポートを行った。

(2) プログラムデザインと企画のポイント

事業のプログラムデザインのねらいとして、①大学生ボランティアが主体的に参画し、見通しを持って活動に関われる体制整備、②プログラムを企画立案するためのノウハウの獲得、③先輩から後輩へと知識・技術の伝達の3つを位置づけた。

小学校5・6年生を対象に、＜夏編＞を8月に4泊5日、＜冬編＞を1月に1泊2日で計画し、各回ともに3か月前から準備を始めた。大学生ボランティアが一からプログラムを企画するにあたり、余裕をもって企画を進めることができるよう、本番までのスケジュール把握ができるような資料を作成し、企画の進捗状況を確認するために密に連絡を取るようにした。また、企画開始からキャンプ本番までの期間が長く、中だるみしたり、モチベーションが低下したりしてしまわないよう、一人ひとりに役割を持たせ、責任を持って関われるようにした。

経験の少ない大学生ボランティアが企画立案するにあたり、チャレンジプログラムに必要な知識・技術の習得はもちろん、施設で提供している様々なプログラムを体験させることで、その指導法や安全管理などについて学ばせる機会を設定した。また、施設の中での活動にとらわれず、地域の教育資源を取り入れたプログラムとなるように、当施設職員とともに地域を回り、その活用方法を探った。プログラムを構成する際には、キャンプ参加者である小学5・6年生の発達段階を考慮するよう助言をした。

本事業に参加した大学生ボランティアの構成は半数が1回生であり、残りの半数が2回生以上であった。2回生以上の全員が過去に本事業に携わった経験があり、日頃から当施設において活動にあっているメンバーであった。当施設職員からではなく、大学生ボランティア同士が先輩から後輩へとこれまでの経験を生かして知識・技術を伝達できるよう配慮した。

(3) 運営のポイント

大学生ボランティアスタッフは15名で構成し、全体リーダー3名、班付きスタッフ12名とした。小学校5・6年生の参加者は、各班6名（男子3名、女子3名）の小集団グループを構成し、それぞれ班付きスタッフを2名（男性1名、女性1名）ずつ配置し、行動や体調など迅速に把握できるようにした。班構成に際しては、参加者同士の新たな人間関係の広がりをもたせるため、学年や性別、所属小学校などができる限り同じにならないように工夫した。班付スタッフは、初日の受付後、保護者と面談を行い、参加者の健康状態や人間関係づくりに際する注意点などを十分に把握した上で指導・支援が行えるようにした。参加者の予期せぬ事故や病気等に備えて保護者との連絡を迅速に行える体制を整えた。

活動の際は原則班での活動とし、班内での人間関係構築を第一の目標としてコミュニケーションを図れるようにした。生活面に関する基本的事項については班付きスタッフが指導・支援し、その他の場面では参加者の自主性・自立性を尊重するよう、「指示」をするのではなく「支援」をすることを心掛けた。

全体リーダーは、本事業の企画から運営の中で、職員や班付スタッフとの連絡調整、全体への指導・助言、班付スタッフの支援などを担うようにした。職員は、大学生ボランティアが中心となって運営できるよう、必要に応じて助言をしたり、安全管理をしたりしながら支援した。

(4) 安全管理のポイント

- 施設外かつ野外での活動が中心となるプログラムであるため、活動内容や場所、ルート、緊急時の避難場所など担当職員及び大学生ボランティアで数回にわたって事前踏査・ミーティングを行い、検討を重ね準備を進めた。また、スタッフとなる大学生ボランティアに対しても、事前にプログラムの体験や指導法、安全管理など本番を想定したトレーニングを実施し、キャンプに備えた。
- 昨年度の課題として「専門の医療関係スタッフの配置」が挙がっていた。そこで、本年度は＜夏編＞＜冬編＞とも期間中看護師を帯同させ対応にあたった。
- 厳しい気候環境下での実施であるため、予期せぬ事故や病気等に備え危機管理マニュアルを作成し、実施本部及びスタッフ全員で共通理解を図った。さらに、活動中には無線や携帯電話を携行し様々な連絡手段を確保した。また、応急処置・医療機関対応担当者を配置し、救急鞆を携行し事故やけがなどの緊急時に備えた。
- 警察署や消防署、病院など近隣の公的機関と密に連絡・連携を図り、緊急時に迅速な対応ができるようにした。
- 事業実施前に参加者の保護者に対してアレルギーや既往症などを調査するために事前調査カードを提出してもらった。また、実施当日の受付時には直接保護者から参加者の当日の健康状態を聞き取るなどして参加者把握に努めた。さらに、事業実施中は参加者用のしおりに「体調チェック表」を設け、健康状態を把握した。
- ＜夏編＞においては一般道を自転車で走行し危険が伴うため、参加者用のしおりに注意事項を掲載し、指導を行った。また、歩道がない場所においては、スタッフ車で参加者を先導するなどして安全確保に努めた。

7 小学生チャレンジキャンプの概要

(1) ねらい

- ・小学生が保護者の力を借りずに様々な活動に挑戦する。
- ・初対面の仲間との人間関係を構築し、中1ギャップに対応できる力を養う。
- ・未知の自然に触れ、自然に対する興味関心をもたせる。

(2) 期日

＜夏編＞ 平成26年8月20日（水）～8月24日（日）【4泊5日】

＜冬編＞ 平成27年1月17日（土）～1月18日（日）【1泊2日】

(3) 広報

大学生ボランティアが本事業のチラシを作成し、近隣（松江市・出雲市・雲南市・大田市・三次市）小学校5・6年生に対して教育委員会および学校を通じて配付した。また、報道機関には記者クラブを通じてチラシを配付し、広報を依頼した。さらに、昨年度当施設の事業に参加があった対象学年の児童に対してもチラシを配付し、参加を呼びかけた。

(4) 参加者

- ①募集対象・人数 各回小学5・6年生30名
- ②参加人数 <夏編>34人（応募数42人） <冬編>33人（応募数51人）
- ③参加者分析 各回最大36名の募集に対して、各回ともに定員を大幅に超える応募があった。参加者の参加地域の内訳は、下表のとおりである。参加者の本事業への参加のきっかけは、「チラシを見て」という回答が最も多かった。また、<冬編>の参加者のうち13名が<夏編>から継続しての参加であった。

参加地域	参加人数	
	夏編	冬編
松江市	13	11
出雲市	9	14
雲南市	0	2
大田市	5	4
鹿足郡	1	1
広島市	2	0
三次市	2	1
安芸高田市	1	1
長岡京市	1	0
計	34	33

表 参加者の地域分布

参加形態	人数
夏編からの継続	13
新規	20
計	33

表 <冬編>参加者の参加形態

(4) 講師等

<冬編> 柳楽天児 氏 (三瓶青少年交流の家研修指導員)

(5) 参加経費

<夏編> 7,618 円

(食事代 13 食 6,990 円・シーツ代 200 円・保険料 325 円・教材費 103 円)

<冬編> 2,300 円

(食事代 4 食 2,100 円・保険料 100 円・教材費 100 円)

(6) 日程表

<夏編>

	8月20日(水)	8月21日(木)	8月22日(金)	8月23日(土)	8月24日(日)
5:00					起床・朝食(弁当)
6:00		起床・テント撤収	起床・テント撤収	起床・テント撤収	三瓶山登山!
7:00		朝食(野外炊飯)	朝食(野外炊飯)	朝食(野外炊飯)	～ファイナルチャレンジ～
8:00	送迎バス	バス移動	キャンプ地出発	キャンプ地出発	
9:00	8:50 JR 出雲市駅発	稲佐の浜から三瓶山へ!			
10:00	受付・開会式	～チャレンジスタート～			テント撤収
11:00	アイスブレイク		キャンプ地到着	昼食(弁当)	ふりかえり
12:00	昼食(バイキング)		昼食(弁当)・テント設営		昼食(バイキング)
13:00	マウンテンバイク練習		選択活動	交流の家到着!	閉会式・解散
14:00		キャンプ地到着	(カヌーor シャワークラ	テント設営	送迎バス
15:00	テント設営	昼食(弁当)・テント設営	イム) ※雨のため中止	バーベキュー(夕食含む)	14:50 JR 出雲市駅着
16:00	夕食(野外炊飯)	磯観察・食材さがし	ドラマ缶風呂		
17:00			夕食(野外炊飯)	入浴	
18:00	入浴			ファイヤーストーム	
19:00	神話シアター	夕食(野外炊飯)		ふりかえり	
20:00	ふりかえり		就寝(テント泊)	就寝(テント泊)	
21:00	就寝(テント泊)				

多伎町宿泊

佐田町宿泊

		ふりかえり 就寝（テント泊）			
--	--	-------------------	--	--	--

<冬編>

	1月17日（土）	1月18日（日）
5:00		起床・朝食（パン弁当）
6:00		交流の家出発（バス）
7:00	送迎バス 8:50 JR 出雲市駅発	～挑～ スノーシューで冬の三瓶を冒険しよう！ （東の原・太平山）
8:00		
9:00	受付・開会式	
10:00	アイスブレイク	
11:00	昼食（バイキング）	
12:00	～絆～ 雪のアートで三瓶を飾ろう！ （雪灯ろう、雪像作り）	昼食（バイキング）
13:00		ふりかえり
14:00		閉会式・解散
15:00		送迎バス 16:00 JR 出雲市駅着
16:00	夕食（炊飯活動）	
17:00		
18:00	～灯～ 三瓶の夜に明かりをとまそう！	
19:00	入浴	
20:00	就寝	
21:00		

（7）内容

①テント泊（夏編・冬編共通プログラム）

夏編では野外で、冬編は講堂でテント泊を行った。大学生ボランティアは参加者が協力しながら自分たちの力で設営・撤収できるよう支援を行った。



テント設営



テント完成



一体感！

②野外炊飯（夏編・冬編共通プログラム）※冬編は屋内で炊飯活動を実施

事業日程の最初と最後の食事を除き、簡易ガスコンロなどを用いて、全てを野外炊飯とした。大学生ボランティアは、安全管理を中心に支援を行った。



野外炊飯

食材探し(貝採り)

「みんなで食べるとおいしいね！」

③「日本海から三瓶山をめざすマウンテンバイクツーリング」(夏編プログラム)

日本海から交流の家までの約 60km の道のりを、3 日間マウンテンバイクで移動した。大学生ボランティアは、参加者の体調や体力を考慮しながら、安全管理や体調管理に努めた。



日本海スタート



「ゴール目指してがんばるぞ！」



④ファイヤーストーム (夏編プログラム)

最後の夜には、ファイヤーを囲み、レクリエーションをしたり、歌を歌ったりして楽しんだ。また、これまでのプログラムのふりかえりも行った。大学生ボランティアが中心となって進めた。



レクリエーションで盛り上がる



心静かに火を囲みキャンプをふりかえる



⑤三瓶山登山 (夏編プログラム)

最終日のファイナルチャレンジは、グループ毎に標高 1,126m の男三瓶山登山を行った。大学生ボランティアは、参加者一人ひとりに声を掛け励ましながら、心を一つに山頂を目指した。



声掛け合って



ゆっくりゆっくり



0mから・・・、登頂 1,126m！

⑥雪像づくり (冬編プログラム)

1 日目、初めて出会った仲間とアイスブレイクやゲームで打ち解けた後、午後からはみんなで協力して雪灯ろう・雪像づくりを行った。夕食後、暗くなってから点灯式を行った。大学生ボランティアは、参加者が主体的に活動できるよう支援を行った。



雪を集めて

きれいだね

みんなで楽しくゲーム

⑦大平山スノーシューハイキング（冬編プログラム）

2日目は、グループ毎に大平山スノーシューハイキングを行った。夜明け前から準備を始め、出発した。天候にも恵まれ、登る朝日を見ながら気持ちのよいチャレンジとなった。大学生ボランティアは、参加者の体調や体力を考慮しながら、安全管理や体調管理に努めた。



日の出前スタート



「気持ちいい〜!!!」



「大平山、全員登頂！」

(8) 参加者・保護者アンケートの満足度・主な記述

<夏編>

①参加者 満足度（参加者 34 名中） 満足 30 名（88%） やや満足 4 名（12%）

キャンプを通してみんなと仲良くなれたし、普段できない体験ができたので良かった。また参加したいと思った。
キャンプではたくさんの人と友だちになった。5日間はあっという間だった。いい思い出ができたのでまた冬も来たい。
このキャンプでいろいろなことを学んだので、これをいろいろなところで活かしたい。
この5日間で体力も少しついたと思う。野外炊飯やテント設営、貝採りなどたくさん体験できてよかった。
満足にお風呂に入ったり海で遊んだりできなかったけど、いろいろなことを達成したときはうれしかった。

②保護者

体力のない娘が、自然の中で稲佐の浜から三瓶山山頂までという目標を達成できたということは、自信につながる体験だったと思います。
普段は親に頼ってばかりですが、自分たちでという自律の気持ちをもったり、友達と協力することの素晴らしさや何かをやり遂げる達成感などを味わったりでき、大変有意義なキャンプだったと思います。
全く知らない人の中に自分から入って生活がともにできたことは、今後社会に出たときの強さとして発揮できるのではないかと思います。
全行程に看護師さんが同行して下さっていたり、スタッフの方、学生さん達と、こんなに恵まれたサポートで貴重な体験をさせていただくことができました。2学期に向けて自律した生活で入ることができたように感じます。
進んで挑戦することや、不安に思うことも乗り越える体験は、将来の生活に必ずプラスになると思います。このような企画を計画、運営することは大変ですが、ぜひこれからもよろしくお願いします。ボランティアの大学生にとっても大きな収穫だったことでしょう。
初めて会う子ばかりですが、苦しい体験も多かったので、深い絆もできたと思います。自分のことばかりでなく、人の気持ちも考えられたり、みんなと助け合うことを学んでくれたと思います。

<冬編>

①参加者 満足度（参加者 33 名中） 満足 30 名（91%） やや満足 3 名（9%）

このキャンプで”自然のきびしさ”や”友達の大切さ”などを学びました。寒くて山を登るのは大変でした。仲間と協力してご飯を作ったり、雪のアートを作ったりしました。このキャンプでたくさんの友達をつくれたのでよかったです。
キャンプの中では、一人ですべてやるときと、友達と協力してやるときがあって、大変だったけど、その分自分でできることが増えたと、友達やさんボラの人と仲良くできて楽しかったです。特に2日目の大平山スノーシューハイキングでは、登るのがとてもつらかったけど、頂上に着いたときは、最後までできたと思ってとてもうれしかったです。
一番楽しかったと感じたことは、雪灯ろうづくりで、一番みんなと協力できた場面だったと思います。キャンプを終えて変わったなと思うところは、人と協力することが増えたなと思いました。
このキャンプで、たくさんの友達ができてよかったです。自然の中で遊べて楽しかったです。キャンプを終えて、何にでも挑戦することが大切だとわかりました。

②保護者

日常とは異なる自然、景色、空気に触れ、初めて出会う人達と協力して過ごしたことで、今までよりあまえがなくなったように感じます。たった1泊、同じ県内なのに、どこか遠くで学んできたような気がしました。よい機会をいただきありがとうございました。
2日間でありましたが、内容が充実していて満足していました。朝日を見ながらの早朝の雪山登山などなかなか経験させてあげられないことなので、本当に感謝です。
自然の中でのいろいろな体験をする機会を与えて下さりありがとうございました。親の手助けの無い環境は、これからの成長と共に増えていきます。少しでもいろいろな状況を経験し、たくさんの人と出会い別れをして、たくましくやさしい子に育ててくれたらと思っています。
1泊2日の短い期間でしたが、キャンプに参加させていただき感謝しています。多くの方にこのチャレンジキャンプのすばらしさを伝えていきたいと思っています。
中学生になったら行かれないとしょんぼりしています。中学生を半人前スタッフに加えていただき、新しい企画をぜひと願っています。

(9) 小学生チャレンジキャンプの成果(○)と課題(△)

○参加者・保護者アンケートからは、この事業に対する肯定的な意見・感想が数多くあり、参加者に対しても有意義な体験の場を提供できた。

△参加者の地域性に大きく偏りが出てきている。その要因の一つとして、送迎バスの運行先もあげられるが、今後この事業を継続し、また、広く普及させるためにも、送迎バスの運行先も含め、広報の仕方を工夫していく必要がある。

8 成果と今後の課題

(1) 大学生ボランティアアンケートの主な記述

<夏編>

企画や準備の段階では、本番をイメージすることができなかったが、本番を終えてみて、自分たちで企画 準備したものが、形になっていく様子を間近で見て感じることができ、達成感を得ることができた。
企画することがとても大変なんだということが分かりました。プログラムを考えていく中で、どのように安全管理をしていくのかなど、考えることがたくさんありました。準備なども何をしたらよいか分からないことがたくさんありました。本当にいろいろなことが勉強になりました。
学生ボランティアが自分たちでできることは対応できるよう リスクマネジメントや熱中症、ケガへの対処などの研修もできればと思う。職員さんに頼ることなく、自分たちでできることはないかいつも思っています。
本番まではいくら考えても課題が積み重なるばかりでとても不安だらけでした。それでもこうして無事に終わったのは皆が誰一人役割を捨てることなくやり切った結果であると思います。自分もいろいろ悩みましたが、自分は最上級生として何ができるのか、後輩たちに何が残せるのか、自分を育ててくれた三瓶に何が返せるのか、そんなことを考えながら過ごしてきました。でも結局自分が何を残すどころか、いろいろな人から逆に多くのことを与えていただいたように感じています。
全体リーダーとして、自分の役割について考えながら進めていったが、思ったように関わることができなかった。私自身不安なことが多かったが、みんながそれぞれに考えて悩んでいたと思う。私はそれを聞いてあげることしかできなくて、もっとうまく関わったらなあと思う感じがした。私の足りないところがたくさんあって迷惑かけたけど、みんなで協力しながらフォローしながら進めていくことができたと思う。最高の仲間でした。

<冬編>

事前踏査のふり返りの際、1年生ももうすぐ終わりなんだし、もっと一人ひとりが責任をもって積極的に行動しなければならないと言われたことが一番印象的でした。これまでも自覚と責任をもって…と取り組んできたつもりでしたが、やっぱり心のどこかで先輩やリーダー、職員さんに頼るといふか任せているという気持ちがあるということを知られました。あのふり返りで目が覚めたという感じでした。全力で臨まないといけないと強く思った瞬間でした。それから食事班のことをいろいろがんばれて、その他のことに全力で精をあげるということができるようになりました。すごく良い経験をしたなって、仲間感謝しています。
今回は時間が少ないいろいろ大変でした。特に、自分はプログラム班のリーダーとして企画に関わっていたけど、どのように班をまとめて、どのように企画を進めていったらいいのかわからず、結局先輩に頼ってしまった。踏査もこのようなあいまいな状態で臨んでしまったため、ぐだぐだになってしまった。その反省を踏まえ、踏査後はそれまでよりも積極的に班の話合いに参加するようにしたけど、もっと早く自分から行動しなければならなかったと感じた。本番では、一回生同士の班付きで、始まる前はとても不安だったけど、子ども達と関わっていくうちにうまく対応することができ、1日目も2日目も子どもたちの笑顔がたくさん見ることができ、子ども達から「楽しかった」という声が聞けて、いろいろやってきてよかったと思うことができた。
学生が主体となって企画し、実行するので、自分のダメなところよいところが見えてきやすいと思う。また、子ども達と一緒にチャレンジを行うので、子ども達と同じ目線の達成感なども得られて、非常によい体験ができたと思った。来年は自分は参加できるかわからないが、せつか企画から事業を行うチャンスがあるので、事業のマンネリ化は避けた方がいいと思った。学生がしっかり考え、職員さんの手を借りて、その時のメンバーらしい企画をこれからも考えていって欲しいと思った。
私は先輩として、引つ張る、支えるのバランスがうまくできず、悩みばかりありましたが、もっと上の立場としてどうすれば下の学年が主体的になれるかを考えていかなければならないと改めて考える機会にもなりました。
本番では、班のリーダーをして、夏では見えなかった子ども達のこと、様々なものに気を配ることの大切さ、時間の使い方、子どもたちをどうまとめるかなど、考えることが多くあり、みんなをまとめることの難しさを改めて実感しました。まだまだ先輩に頼ってしまうことが多く、力不足なことがあったので、今回の反省を生かして次のチャレンジキャンプ、また、みんなの笑顔が見られるようステップアップしていきたいです。

(2) 成果

○大学生ボランティアが本事業を通して、企画することの難しさ、情報共有の大切さ、自分の役割

の自覚と責任の重要性などを実感しながら、一人ひとりが考え悩み、目標に向かってみんなで協力し、課題を一つずつ解決していくことで、学びを深めている様子が、アンケートから伺える。1 回生は、先輩や周りの人に頼ってばかりいた自分に気づき、もっと主体的に関わらなければいけないと気持ちを改めたり、先輩は、後輩に何かを伝えなければと思いつつも、逆にみんなから学ばせてもらっていたことに気づいたりしている。また、企画する上で、悩んだときはねらいに立ち返ることや参加者の姿を思い浮かべることが大切であることに気づき話し合いを進めたり、チャレンジプログラムを考えるにあたり、必要な技術の取得についてやリスクマネジメント等様々な視点から考えたりできるようになった。一人一人がリーダーとしての資質を向上させ、自分自身を大きく成長させた。

○事業の企画・運営に係る話し合いはもちろん、事前踏査やプログラムの指導法等を担当職員と綿密に行うことで、チャレンジキャンプのねらいや全体像、リスクマネジメント等が徐々に明確になり、本番では職員に頼らない大学生ボランティア主体の運営にすることができた。

(3) 今後の課題

○<夏編><冬編>とも3か月前からの準備となるが、こちらで設定した事前踏査・ミーティング以外は、大学生ボランティアが自発的にミーティングを行って進めている。しかし、大学生ボランティアが2つの大学で構成されておりすぐに集まらないことやそれぞれの学業等、学生の負担を考慮し、もう少し早い段階で事前踏査やミーティング等の日時の調整をし、見通しをもったタイムスケジュールを設定していく必要がある。

○大学生ボランティア参画の趣旨からも、小学生チャレンジキャンプとしてのねらいからも、より教育効果の高いプログラムを検討していくことが求められる。施設が提供できるプログラムも含め、より身近な周辺フィールドにも目を向け、地域の教育資源を取り入れたプログラムとなるように、今後もその活用方法を探っていく必要がある。

9 普及計画・普及実績

ホームページ上に要項や事業の様子などを掲載することで事業内容を社会に広く周知することができた。また、<夏編>では、地方新聞1社、日本教育新聞および大田市のケーブルテレビが事業の一部を取材後に報道し、取組を広く広報することができた。

(担当 事業推進係 藤江 龍 ・ 企画指導専門職 濱野健一)

